

[ふるさと研究]
よみがえった昭和初期の
小倉の街
～ガラス乾板の画像調査報告～

筑豊北九州地域研究会会員・菊ヶ丘「語ろう会」会員
久門 守 末永裕貴

- はじめに
- I 画像調査に取り組んだ経緯
 - II 判明した乾板画像の5W1H
撮影したのはだれ 時期はいつ 何のために
 - III 要塞地帯の無断撮影は徴役二年
 - IV 写真師の慎重な撮影
 - V 乾板は市民の貴重な文化財
おわりに

はじめに

北九州市小倉北区の真ん中、勝山公園あたりには個性的な建物が隣り合わせて並び、デザインと歴史を競っている。赤・白・黄・黒・茶のカラフルな複合ビル「リバーウォーク北九州」、四層五階の堂々とした小倉城天守閣、震度六までは耐えられる大きなガラス箱の市本庁舎（十五階建て）、そして二本の巨大なチューブをつないだような市立中央図書館である。中央図書館は著名な建築家磯崎新さんの作品だ。ここに「昔のガラス乾板（略称「乾板」）が眠っている」と

聞いたのはもう七年前になる。諸事情ですっかり遅れたが、私たちはこの乾板の被写体の調査を司書や出版人、市民の協力を得て進め、二〇一八年一月、中間報告書をまとめた。提出した中間報告書はすぐデジタル画像データと共に公開され、これによって新たにもたらされた見地、知識を加えて二〇二〇年二月、最終報告書を提出し予定の作業を終えた。

写真機の感光材として用いられた乾板は三十七枚あった。うち一枚は全面が劣化し画像が崩壊していたが、三十六枚はほぼ良好だった。今から一世紀近く前、城下町の面影を残す旧小倉市が「軍都」と呼ばれていたころの街や駐屯地、名所、河川が撮影されていた。乾板は近年、細密な記録性を持つ「写真の原版」として注目され、資料価値を高めている。国の重要文化財にも加えられた。ここでは少ない枚数ながら幅広い「公民連携」で画像調査が実った過程を記しておく。
(注) 西暦と元号の併記は明治・大正・昭和のみとする。

I 画像調査に取り組んだ経緯

筆者らは足立山麓の住民でつくる地域調べサークル・菊ヶ丘「語ろう会」の会員だが、筑豊北九州地域研究会にも所属している。「語ろう会」は足元の近現代にテーマを求め、生活者の視点に重きをおいて調査や資料収集に取り組んでいる。メモ帳をめくると二〇一三年九月である。住民自治研究者から「中央図書館に長いこと乾板が紙箱に納められている。小倉の街を撮ったものらしいのだが、何が写っているかよく分らず、市民が閲覧できないままになっている。あなたたちの力で各コマの説明文を作ってはどうか。そうすれば誰もが利用できるようになる」と教えられた。

北九州市域は終戦まではほぼ全域が法律で下関要塞地

帯に指定され、地形や交通体系、主要産業にかかわる写真撮影は厳しく制限されていた。それがふるさとに戦前の街の写真が少ない理由なので、フィルムが登場するまで使われた乾板の重要性はすぐ理解できた。ただ、画像は単にそれだけではなかなか活かせない。へだれが・いつ・何を・どこで・なぜ・どのようにして撮ったのか」という「写真の5W1H」がはつきりして初めて確かな歴史資料になる。

「語ろう会」会員は乾板の存在に驚くとともに、いのちを吹き込む説明文づくりに心は大きく動いた。だが、そのころ会は二つのテーマを抱えていた。一つは一九五三（昭和二十八）年の北九州大水害（通称「二八災（につばちさい）」）の証言採取と写真収集で、他は文豪松本清張の黒原（小倉北区）時代の克明な足取り調査だった。双方のリポートがおおむねまとまった二〇一六年夏、名古屋市の出版社「樹林舎」（山田恭幹社長）から写真史シリーズ『北九州市の昭和』の編集を手伝ってもらいたいと要請があった。

乾板はゆがみややすいフィルムと異なり、真つ平らなガラス板に光の情報を集めているので解像度は高く、焼き付けてもデジタル化しても画質はとて面白い。けれども、年月が経過しているので素手では触られず、口にはマスクも欠かせない。それに何とも厄介なのは「市民の財産」なので簡単には館外へ持ち出せないことだった。

そこで樹林舎へ思い切って「貴社の負担で乾板をぜんぶデジタル処理していただけないだろうか。画像調べは私たちが手弁当で取り組む。これを含めて『北九州市の昭和』をまとめればすべてが立派な地域貢献になる」と提案した。すると山田社長から「承知した。うちが奉仕活動としてやる。データと付随する権利は一切をそちらの図書館へ寄贈しよう」と回答があっ

た。これによって画像の出力やパソコンの活用が可能になり、「こじれるのでは」と心配していたデジタルデータの利活用権問題もいっぺんに解決し、調査や報告書作成のメドがたった。

二〇一七年一〇月、樹林舎編集部員だった櫻井京さんが中央図書館研究室へ機材を持ち込み、司書寺坂ゆきえさんと共に計測、状況確認等を済ませてスキャンニングを行った。三十七枚の乾板はすべて長辺一六五ミリ、短辺一二〇ミリのキャビネ判だった。うち三十六枚は塗布されていた感光乳剤にさほど変色が見られなかった。縁辺に若干の剥離やすり傷があったが、画像に大きな影響はなく、A3サイズまで拡大できる画素数を獲得できた。図書館側は改めて乾板に整理番号を付けた。

「語ろう会」の調査担当になった私たちは基礎知識を得るため当時レファレンス・サービスを担当し二〇一九年に退職したベテラン司書の轟良子さん（八幡東区）に都市計画研究者、郷土史家らを紹介してもらった。一方、寺坂さん、轟さんと手分けして旧小倉市を主題にした何冊もの写真集、刷り物、写真絵葉書、市町村誌との照合を進めた。すると国書刊行会が一九七九（昭和五十四）年に発行した『写真集 明治大正昭和 小倉』に乾板の図柄通りのものが十九枚掲載されていた。一九三〇（昭和五）年に出た写真集『市制施行三十周年記念 こくら』（鉄道通信局発行）には類似の絵柄が一枚あった。昭和初期発行の軍関係写真絵葉書からも似た画像が二枚見つかった。

パソコン上でデジタル画像を拡大すると期待通り、文字の書かれた板や石柱、看板、送電線、電信線、煙突、建物、橋梁、人影など新しい情報が得られた。これらの情報と幕末、明治、大正、昭和初期の地図を片手に私たちは現地を訪ね、長寿者に教えを請うた。その結

果二〇二〇年春までに推定を含めれば、すべての乾板について5W1Hの全部もしくは一部が判明した。

II 判明した乾板画像の5W1H

〔撮影したのはだれ〕保管されていた紙箱や包装紙、サイズ、厚さ、劣化状況などから乾板は同質の国産品で、すべて特定の時期に撮影に用いられたと推定した。仕分けると小倉城跡内に駐屯していた陸軍歩兵第十四連隊に関するものが七枚で最も多かった。戦前、軍関係を撮影できたのは軍自身か市町村だけである。しかし、被写体には旧小倉市の施設や名所旧跡もかなり含まれ、所有してきたのも市の社会教育施設だったので、陸軍ではなく旧小倉市から委嘱された写真師が指定された場所や行事を撮った、と判断した。

この写真師を私たちは特定できなかったが、『北九州市の昭和』が発行され、中央図書館が乾板の中間報告書とデジタルデータを公開した直後の二〇一八年末、双方を入手した上田薫さん（小倉北区）から「森山写真館の二代目館主、森山菊太郎（一八六七―一九四五年）と考えるべきだ」と連絡をいただいた。上田さんは非破壊検査写真撮影専門技術者だった。会社退職後はキャリアを活かして古い写真をもとに地域の近現代史を解明し、フィルム画像のデジタル化による保存にも努めている。菊太郎については後の《IV 写真師の慎重な撮影》の項で詳述する。

〔時期はいつ〕デジタル処理した画像の拡大で多様な情報が得られたので、発行済み写真集に記されていた撮影時期にはとらわれず、独自に検討した。▽わが国で乾板が各地で広く使用されたのは、関東大震災で被災した唯一の工場が復興した後であった▽被写体の公共施設や記念碑の開設、建立時期は一九二二（大正十一）年か翌年だった▽現在の妙見宮を撮った

整理番号6番（以下、番号のみ表記）の画面から「昭和貳年」の文字が見つかった▽画像に旧足立村域の有名な神社（10番・13番など）が含まれていた。これに対し旧企救町域で撮影したものは全くなかった。旧小倉市と旧足立村の合併は一九二七（昭和二）年、旧企救町との合併は一九三七（昭和十二）年である。となると、この間つまり「昭和初期に撮影された」と考えなければならない。



妙見宮境内で写っていた「昭和貳年」の文字
（北九州市立中央図書館所蔵）

では、昭和初期のいつなのか。手掛かりがあった。第十四連隊関係画像をつぶさに点検すると五枚に関連性がうかがえたのだ。18番はキャビネサイズでは宮庭や兵舎を撮影したように見えるが、引き延ばすと数個中隊の多数の兵士が整列し、先頭には騎乗した将校、その前に軍旗を保持した数人が立っていた。35番では

中央図書館保存の「ガラス乾板」一挙公開!



- 1 松林が続く日明の海岸（小倉北区中井口）
 - 2 乃木坂へ続く道（小倉北区内）
 - 3 北山越の根上がり松（小倉北区高浜）
 - 4 小倉市公会堂及び記念図書館（小倉北区室町）
 - 5 赤坂の松林（小倉北区赤坂）
 - 6 御祖神社（妙見宮）の境内（小倉北区妙見町）
 - 7 小倉城跡の内堀と忠魂碑（小倉北区内）
 - 8 ☆松林越しの2代目小倉市役所（小倉北区室町）
 - 9 ☆即非禅師の座禅石（小倉北区寿山町）
 - 10 ☆広寿山福聚寺の「不二門」（小倉北区寿山町）
 - 11 小倉城跡の土塁（小倉北区内 ※撮影地不明）
 - 12 足立山麓の歌塚（小倉北区妙見町）
 - 13 広寿山福聚寺の仏殿（小倉北区寿山町）
 - 14 ☆南西側から見た小倉城跡の本丸（小倉北区内）
 - 15 漁家と網干場（小倉北区長浜町）
 - 16 ☆貯木場と陸軍倉庫群（小倉北区・手前馬儀 倉庫城内）
 - 17 撮影地不明
 - 18 ☆宮庭に整列する歩兵第14連隊（小倉北区内）
 - 19 神嶽川の水門橋（小倉北区古船場町）
 - 20 撮影地不明
 - 21 紫川河口の船着き場（小倉北区船頭町）
 - 22 刑場跡の「首切り地蔵」（小倉北区日明）
 - 23 ☆埋め立てられた外堀（小倉北区室町）
 - 24 ☆歩兵第14連隊将校集会所（小倉北区内）
 - 25 小倉城跡内（小倉北区内 ※撮影地不明）
 - 26 3代目の小倉市役所（小倉北区内）
 - 27 ☆小倉城跡内の大手門（小倉北区内）
 - 28 小倉城跡の松ノ丸前広場（小倉北区内）
 - 29 歩兵第14連隊の大練兵場（小倉北区内）
 - 30 歩兵第14連隊の正門（小倉北区内）
 - 31 ☆戦時体制前の大練兵場（小倉北区大手町）
 - 32 明治27・8年戦役（日清戦争）記念碑（小倉北区内）
 - 33 元歩兵第12旅団司令部（小倉北区内）
 - 34 ☆人気のない歩兵第14連隊営庭（小倉北区内）
 - 35 ☆出立する歩兵第14連隊（小倉北区内）
 - 36 ☆元歩兵第12旅団司令部下の堀と石垣（小倉北区内）
- ※番号は図書館の整理番号。「37 小倉城天守閣跡（小倉北区内）」のみ画像が全面劣化のため掲載を見送った。
 ☆印は初公開の画像。



その兵士たちが駐屯地西門を出立しており、礼服姿の人々が見送っていた。だが正門付近や営庭の一角を撮影した24番、30番、34番には立哨の一人を除いて目立つ人影がなく、連隊が立ち去る前の静けさや立ち去った後を思わせるような光景だった。

第十四連隊は一九二八（昭和三）年十一月十九日、小倉城跡内より当時は隣接自治体だった旧企救町の北方へ移っている。この五枚は連隊の転営当日の模様を記録したのではないのか、というのが私たちの見方である。そうすると撮影時期はこの年に絞られ、他の画像の市民の服装や季節感を加味して「写真師が各地を回ったのは晩夏から晩秋まで」という結論に至った。

〔何のために〕 関東大震災では陸軍造兵廠東京工廠（小石川）も壊滅的な被害に見舞われた。その再建をめぐって、一九二七（昭和二）年秋、小倉城跡と隣接地一帯に大規模な新工廠の建設が決まった。『北九州市史 近代現代 行政社会編』によると（設置場所は、歩兵第十四連隊城内営所を包含する小倉城本丸地域以南の旧城内ならびに近接の民有地二万三〇〇坪を買収し、敷地面積一七万六五八一坪が特定）された。TOTO本社・小倉第一工場の四、五倍、福岡ドームの八個分の広さに相当し、あおりで第十四連隊は北方へ引越すことになった。

旧小倉市民は自らも「軍都」を誇りにし、『小倉六十二年小史』によると毎年五月二日、三日には大掛かりな「招魂祭」が催され、小史掲載の座談会出席者は（篠崎練兵場でやっていたね。今の旧造兵廠跡です。明治四十四年から始まったと記憶しています。が、祇園祭より賑やかでしたよ」と語っている。

街が地方の一軍都から全国でも屈指の軍需産業都市へ変ぼうする——その「大転換の時」を後世へ伝えるため、城跡を主舞台に撮影が行われた、と私たちは推

測している。

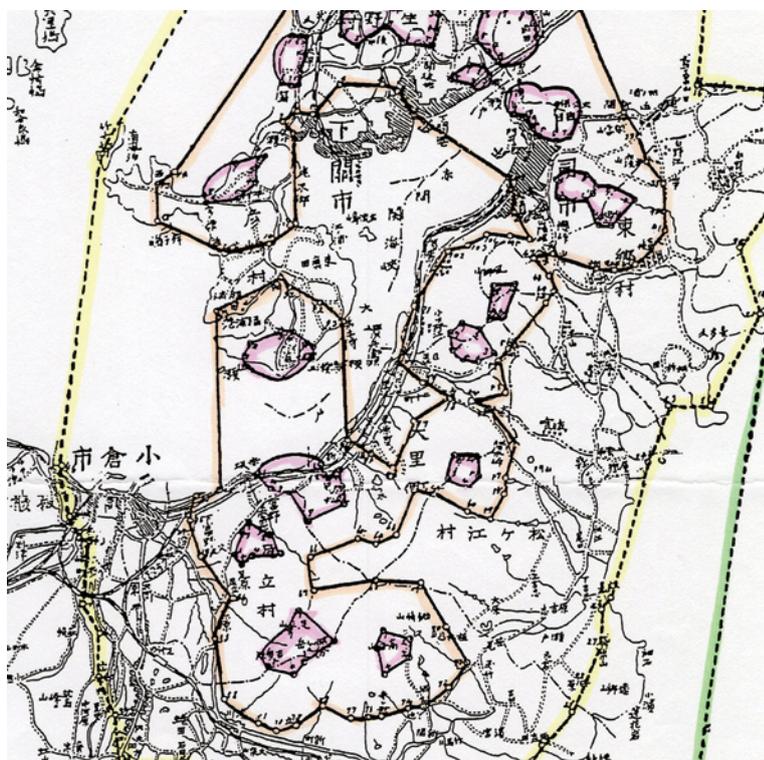
以上のような判断、推定に基づき、画像台帳は各コマに一枚の調査票を添える形式にし①タイトル（仮題）②撮影場所③画像所蔵者④被写体概要（写っている人や建物、山、川など）⑤画像に関する資料・参考文献・証言、の五項目の小欄を設けて印刷画像やパソコン画面と照合できるようにした。

なお、城跡に出現した小倉陸軍造兵廠は戦車、高射砲、機関銃、風船爆弾などを製造した兵器工場群で、最盛期には四万人とも六万人とも言われる職員、工員、動員された旧制中学生、女学校生らが生産に従事

し、敗戦とともに組織は瓦解、建物や施設、設備は連合軍に接収された。

Ⅲ 要塞地帯の無断撮影は徴役二年

その言葉を聞いただけで緊張し重圧を感じる「要塞地帯」とはどのようなところだったのか。明治政府は発足するとすぐ領土、領海を防衛する強固な軍事施設の必要性を痛感し、響灘（外海）と周防灘（内海）をつなぐ関門海峡（当時の名称は「下関海峡」）は東京湾、大阪湾と並んで「最緊要地」とした。山口県下関市や北九州市の山中や高台、島々では一八八七（明治二十）年から砲台、観測所、弾薬庫、宿営施設などが



下関要塞地帯図（明治43年製版より拡大・北九州市立中央図書館所蔵）

築かれ、「下関要塞」は一九〇〇（明治三十三）年に完成した。各要塞の周りは広大な範囲が要塞地帯法によって四区域に分けてさまざまな規制が実施され、要塞司令部と憲兵隊が監視した。

区域内で市民が撮影やスケッチをした時は目的、区域、地点、期限、住所、氏名を記入した願書を司令部に提出して許可証を得、仕上げた写真や作品は検閲を受けなければ発表や印刷はかなわなかった。下関市のYVSHI生は美術誌『みづゑ』第六八号（一九一〇（明治四十三）年十一月発行）で「関門海峡の風光は実に明媚であります。然し砲台が多いので、風光の美は其十分の一も描現す事は出来ません」と嘆いている。法律に反した場合、当初は重禁錮一年以下や罰金だった。

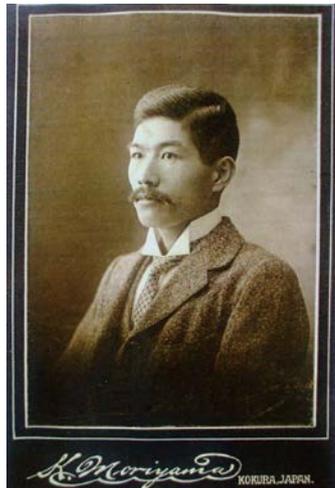
大正になると機動性がない要塞は全国的に再編整備された。下関要塞は地理的に中国大陸や朝鮮半島、対馬海峡に近いうえ、航空機、潜水艦攻撃から北九州工業地帯を防衛する目的で、高射砲、高射機関砲等の配置が進められ、一九四〇（昭和十五）年の二度目の法改正で罰則は懲役二年以下、罰金は二千元以下に引き上げられた。

この改正前後に二回、私鉄「小倉鉄道」（後の国鉄添田線）を取材した鉄道写真家まきのしゅんすけは月刊『RAILEIL』一九七八（昭和五十三）年五月号で当時をこう振り返っている。（小倉鉄道は、それはそれは恐ろしくて：なぜ恐ろしいかといいますと、ここは絶対カメラマンを近づけない非常に要塞堅固なところにありますね。誰も撮影させない。そこへまあなんと、このこと二人のカメラマンが行くんですね。特ダネをものにして行くんです）「もし見つかったら最後、すぐ憲兵隊に引き渡され、有無を言わず監獄にぶちこまれて二度と帰れない言うオン

ロシーイ地帯であった。一に憲兵、二に特高、三に警官」と言われていたところである。プロの辛さと根性がないにじんでいる。

IV 写真師の慎重な撮影

このような難しい条件下で「森山写真館」の森山菊太郎は各所を撮影して回った。上田さんが国会図書館で入手した資料の一つに繁華街マップ「大日本職業別明細図」一九二九（昭和四）年がある。この中の「小倉市・店舗別図」には四軒の写真館が載っている。森山写真館は「宝町」（現在は船場町）の区画に含まれていた。一八七六（明治九）年に森山國蔵が開き、菊太郎は長男。父子とも長崎のわが国最初の職業写真家、上野彦馬の下で光学や化学の原理、撮影技術を学んだ。



森山菊太郎氏（上田薫さん提供）

森山父子は一九〇〇（明治三十三）年には「陸軍野戦病院（後の小倉陸軍病院）建設途中の写真」を、一九〇二（同三十五）年には「明治天皇御召列車 外観・車両内部」（撮影地は門司の大里駅）を撮っている。菊太郎自身も写真師としての腕は確かだった。翌年の第五回内国勸業博覧会の写真技術部門で三等賞を獲得した。大正時代の作品としては「勝田四方蔵中将肖像」や「小倉師範学校卒業写真」「明治専門学校卒業写真

アルバム」などが確認されている。

これらの点を踏まえて上田さんは「菊太郎の代になると旧五市にもそれぞれ写真師はいたが、主に記念写真や肖像写真を手掛けていた。その中で森山写真館は野外撮影にも取り組んでいた。中央図書館の乾板には第十四連隊が何枚も写っている。となると軍部とりわけ下関要塞司令部に信頼されていた写真師でなければ撮影許可は出ず、森山写真館の受託しか思い浮かばない。菊太郎とその助手が重い写真機材を荷車や肩に担いで運び、撮影して回ったと推定するのが妥当だ。なお肖像写真も撮ってもらった勝田中将は少将のころ下関要塞司令部に勤務していた」と語る。

軍部に顔の利く写真師であっても旧小倉市内を思い通りに撮れた訳ではない。要塞地帯法、軍機保護法に触れないよう被写体と構図は慎重に検討した形跡がうかがえる。乾板画像は視点が低い「近景」「中景」が大半で、周辺や背景はあまり入っていない。広範囲をとらえた「遠景」も地形が詳しく分かるような図柄はなかった。駐屯地の将兵は一枚を除いて極めて小さく、発電所、工場は煙突だけだったり、鉄道は複線を単線のように撮ったり、被写体の魅力や撮影技術の巧みさ、仕上げた写真の素晴らしさより、検閲に引っかけられない図柄を選択している。

一枚だけ「おやつ？」と思わせるものがあつた。「松林が続く日明の海岸」（一番）である。この画像のほぼ中央のはるか後方に響灘の白鳥（男鳥）が写っているのだ。いまは「洋上石油備蓄基地の島」として知られるが、要塞建設時から艦艇、船舶にらみを利かす砲台が計画されていた島嶼の一つで、撮影やスケッチは禁じられていた。高射砲台が竣工したのは一九三七（昭和十二）年。それでも乾板が破棄されずに残っているのは、当時の検閲官がキャビネ判の乾板を拡大

鏡で見たくらいでは鳥陰が認められなかったからだろう。私たちはデータ画像を新聞紙サイズまで引き延ばして初めて目にした。



拡大して分かった白島の男島
(北九州市立中央図書館所蔵)

の木が枝を広げている。松はやせた土地でも育つうえ風や砂に強く、松脂は葉に、松葉は家庭燃料の焚き付けに重宝されていた。樹形も好まれ「一本松」や「三本松」など住民は地名にも用いていた。

ビルが建ち並び、新幹線や高速道路が走り、海岸は港湾施設で埋まった現在の都市圏からは全く想像できない。が、小倉出身の文豪松本清張（一九〇九—一九九二年）が昭和初期のふるさとを舞台にペンを走らせた小説『表象詩人』に描かれているたまたまといは類似点が多い。

「あのころの小倉の街を思い出すと、どこもが静かな風景で泛（うか）び上がってくる。ここは城下町の名残が濃厚であった。城は葛蔓（つたかずら）に濃く蔽（おお）われた石垣だけが、その上には松の木立が繁り周濠は蓮（はす）と水藻で塞（ふさ）がれ、あたりは松林と雑草のひろがり、煉瓦造りの陸軍弾薬庫の傍の坂道をひとり通るのが恐ろしくくらいであった」。繁華街もちよつとそれたら（うら寂しい区域）になり、狭い間口の（旧い家なみがつづく）という。城跡一带は画像と文章がピタリと一致している。

それにしても、薄いガラス板が百年近くも割れずによくぞ残っていたものだ！と感心させられる。乾板はまず開館してさほど間がない「小倉市立記念図書館」（4番）へ託された。名称に「記念」が添えられているのは当時の流行りで、一九二一（大正十）年に（時の皇太子殿下ご渡欧にあたり、市の記念事業として）（北九州市史 教育文化編）整備され、翌年開館した。

困窮した家庭に育った清張はこの建物に通つてさまざまな知識を得た。随筆「セピア色の詩風景」朝日新聞一九八〇（昭和五十五年）六月七日付夕刊で（天守閣跡の大きな石垣の前を突き当たると、正面が小倉図書館だった。旧偕行社（陸軍将校の集会所）で：市

が貧乏なせいとか特に改造を加えるでもなく、うすよごれた四角な白い壁が殺風景だった」と回想し、着物にセルの袴（はかま）をつけた（閲覧本出し入れ窓口）だった（和田さん）の、古書の虫干しの様子や閲覧本の丁寧な扱い方に（わたしは本の大切なことを：教えられたように思う）と書いている。

このころの公共図書館は主に本を収集し、閲覧に供していたが、博物館の役割も担い、石器や土器、動植物の標本など貴重なものは幅広く受け入れていた。乾板が図書館にあったのもこのような事情による。だが旧八幡、門司市などと比べて旧小倉市では図書館の社会的な役割がさほど認識されておらず、あちこち仮住まいを繰り返していた。旧偕行社の建物から外観がユニークな中央図書館に落ち着くまで、収蔵図書や資料は実に八回も引越している。にもかかわらず乾板が紛失せず、保存されてきたのは図書館人が「これも未来への大切な預かりもの」（轟さん・寺坂さん）と強く意識して引き継いできたからに他ならない。

今日（乾板は最初にカメラでとらえられた第一次画像であり、焼き付けられた第二次画像としての印画より一層多くの情報を含む、原版として位置づけられる）（久留島典子他編『文化財としてのガラス乾板』）。これは写真師が焼き付ける際に「腕の見せ所」として施していた加工や修正がいつさいなされておらず、印刷されたり、写真絵葉書にされたりしたものとは異なることを意味している。それに（写真の最も基本的な機能が記録（ドキュメント）であることは間違いない）（飯沢幸太郎著『日本人の写真・歴史と現在』）。ありのままの記録性と原版である点が、近年の相次ぐ国の重要文化財指定にもつながっている。

写真の歴史の中で乾板を用いた撮影は、フィルムより長い。明治中期から昭和の半ばに及んでおり、全国

V 乾板は市民の貴重な文化財

大正から昭和初期、門司、小倉、八幡、若松、戸畑の旧五市は恐慌、不況の波をかぶりながらも臨海部に多様な工場が並び、「四大工業地帯」（北九州・京浜・中京・阪神）の一つに数えられていた。小倉の隣の八幡は「鉄の都」、門司は大陸交易、東南アジア、欧州航路の最後の寄港地としてにぎわい、文化、スポーツも花開いていた。

「これに比べて乾板の小倉は何と活気がないのだろう」「地味な街だったんですねえ」。二〇一九年に五か所で催した私たちの報告会では、こんな感想が相次いだ。海岸、公園、城跡内、郊外のあちこちで松

的には膨大な枚数が様々な場所で保管されている。北九州地域の場合、官営の時代を刻んだ製鉄所や鉄道関係施設、新聞社（西部本社）等を例外とすれば、民間団体、市民の間で保存されている枚数は他所よりはるかに少ないだろう。それでも一度は広く提供を呼び掛けてみる必要がある。なお中央図書館の乾板はスキヤニングの際に刷毛で簡単に付着物を取り除いただけであり、ぜひ本格的なクリーニングをしていただければとも思う。

おわりに

話を少し戻す。先に触れた若松区沖の白鳥（男島）が乾板に写っているのに最初に気付いたのは、二〇一九年五月、寿山市民センターでの報告会に参加していた高齢男性である。プロジェクトで撮影していた1番を見ていて「あっ、白鳥だ」と驚いたような声を上げ、約六十人の出席者で意見を出し合い、確認した。

このような市民の記憶、見識に助けられた例は他にもある。「山中の石碑」（9番）は「彫られている漢字の書体は禅宗のお坊さんのものでは」という公務員男性の一言がきっかけになり被写体が判明した。碑文解説は黄檗宗「長清寺」住職、玉井竜滋住職に手伝ってもらった。また俳句愛好者への取材で杉田久女（一八九〇—一九四六年）がしばしば訪ね秀句を詠んだ場所だったこともわかった。

かつて小倉城跡で石垣が三段に見える所は二か所あった。27番はどちらを撮影したのか専門家に当たったがはっきりせず迷っていると「野面積みの石積みと同じものは二つとない。拡大写真と積み石を現地で見比べたらどうか」というアドバイスが前出の公務員男性から寄せられ、「大手門」と判明した。このよ



昭和初期の小倉城大手門前の石垣
(北九州市立中央図書館所蔵)



現在も同じ場所にある同一の石垣

うに多くの方の協力を得た。

中央図書館の乾板は「ようやく画像調査を終えまして」と書いて締めくくっても、被写体の輪郭が浮かび上がっただけである。画像に写し込まれたはずまい

や人々が発する音、声を私たちはまだ聞いていない。監視と検閲の目が光っていた要塞地帯で、原爆投下目標にまでなった兵器工場群が展開していた街で、人々は何を思い、将来にどんな希望を抱いて暮らしていたのか。そんな市民の日々を長寿者への取材などで可能な限り文字にして、わずかでも将来へ伝えていくことをお約束し、報告を終わりたい。

主な参考文献

【ガラス乾板関係】

写真の科学 田中益男著 共立出版 1992年

日本人の写真・歴史と現在 日本放送出版協会 1994年

写真乾板のデジタル化及び保存について 宮田則也著 大阪市立大学紀要5号 2012年

ガラス乾板の整理と保全と情報化から見えてくるもの 高山さやか著 日本写真学会誌 79巻1号 2016年

文化財としてのガラス乾板 久留島典子他編 勉誠出版 2017年

日本写真保存センター「よくある質問」日本写真家協会HP <http://photo-archive.jp/faq/>

「ガラス乾板の歴史・国産化の歩み」富士フィルムHP <https://www.fujifilm.co.jp/corporate/aboutus/history/ayumi/dani-01.html>

【下関要塞地帯関係】

日本築城史 浄法寺朝美著 原書房 1971年

「よしみ」史誌 「よしみ」史誌編集委員会 下関市立吉見公民館 1985年

兵旅の賦（第2巻） 北部九州郷土部隊史料保存会編 北部九州郷土部隊史料保存会 1978年

下関市史（市制施行〜終戦） 下関市市史編修委員会 下関市 1983年

北九州の戦争遺跡改訂版 北九州平和資料館をつくる会編刊 2016年

法令全書・明治32年 要塞地帯法 内閣官報局 1899年

【地域史関係】

- 足立村誌 磐梨登晁編刊 1916年
 小倉市誌(続編) 小倉市役所編纂 小倉市役所 1940年
 写真集 明治・大正・昭和 小倉 今村元市編 国書
 刊行会 1979年
 表象詩人(松本清張全集第39巻) 松本清張著 文芸
 春秋 1982年
 セピア色の詩風景 松本清張寄稿 朝日新聞夕刊掲載
 のエッセー 1980年
 北九州市史(近代現代 行政社会) 市史編さん委員
 会 北九州市 1987年
 北九州市史(近代現代 産業経済Ⅰ) 市史編さん委員
 会 北九州市 1991年
 北九州市史(近代現代 産業経済Ⅱ) 市史編さん委員
 会 北九州市 1992年
 北九州市史(民俗) 市史編さん委員会 北九州市
 1989年
 地図で見る近代の小倉室町と城内 出口隆著 北九州
 市芸術文化振興財団 2010年
 市制施行三十周年記念「こくら」 中野昇編集 鉄道
 通信局 1930年
 還暦 小倉市総務部編集 小倉市役所 1960年
 足立山麓の史跡を探る 足立山麓文化村編 せいうん
 2004年
 足立山麓文化資源基礎調査報告書 足立山麓文化調査
 会 1996年
 広寿山案内記 玉井虎雄著 広寿山 1955年
 【地図関係】
 小倉藩土屋敷絵図 北九州市蔵 幕末
 1/100,000地図「小倉」 大日本帝国陸地
 測量部 1899年
 1/15,000地図「小倉市」 参謀本部陸地測
 量部 1925年
 1/15,000地図「八幡市」 参謀本部陸地測
 量部 1926年
 大日本職業別明細図 小倉市 東京交通社
 1929年

最新式小倉商工地図 萬年社

1931年